

# ラグビーワールドカップを題材とした 高校「地理総合」の単元構成の開発 —歴史的思考力を活かす試みを含めながら—

Development of Unit Composition of High School “Geographical Synthesis”  
Based on Rugby Football World Cup

菊 地 達 夫  
KIKUCHI Tatsuo

## I. はじめに

2019年9月から11月まで開催した第9回ラグビーワールドカップ日本大会は、日本チームの躍進もあり、盛況のうちに幕を閉じた。その過程では、ラグビーに対する興味関心を一気に向上させた。こうした日本を舞台としたスポーツイベント、日本チーム、日本人選手の活躍は、スポーツのみに限らず、他分野へ影響を与える。教育分野も例外ではない。例えば、高校地理教科書・資料集（世界地誌）には、スポーツイベントの様子（写真資料など）を掲載している。そこで、本稿では、興味関心を一気に高めたラグビーワールドカップ大会を題材とした高校「地理総合」の単元構成の開発を行う。

ところで、これまでスポーツを題材とした高校地理授業に関する先行研究・実践には、次のようなものがある。三堀（1996）では、スポーツを文化として捉え、地理教材として活用注目した。スポーツ地理のテーマとして、①各種スポーツの起源とその後の伝播、

②世界・国家・身近な地域、さまざまなレベルでの地域区分の問題、③世界・国家・身近な地域、さまざまなレベルでの人類共通の一体感と個々の民族の独自性、④地域的不均衡の表象としてのスポーツ、⑤社会体制とスポーツ文化の関係、国際化の最先端としてのスポーツを挙げ、サッカーのW杯やJリーグの事例を取り上げた。地理教育研究会編（2010）では、生活の変化の学習場面として、サッカーJリーグを題材とした地理教材の可能性について取り上げている。菊地（2019）では、高校「地理探究」の授業として、スポーツ・ツーリズムを題材とした単元開発を行った。具体的には、「交通・通信、観光」の1つの単元（観光）として、アジア冬季五輪の開催地の特色に着目し、地球環境問題も関連させ、思考判断しながら理解させようとする学習活動である。いずれもスポーツが、地理授業における恰好の教材であることを示唆している。

他方、スポーツを題材とした地理授業の開発は、その影響力や多様性を考えると、まだまだ少ない。本稿の成果は、その点の課題解

決の1つとして位置付けたい。

研究方法として、指導方法の方向性や枠組みを示し、それをもとに単元構成を構想した。次に、構想した内容を大学教養科目の授業へ置換し、その学習効果を確認した。続いて、高校授業への修正・改善を行い、単元構成を示した。

現在、高校の教育課程は、移行期間にあり、現場で構想した授業の検証は難しい。その代替として、大学教養科目の授業実践・検証に着目した。旧教育課程の地理歴史科では、地理分野（地理A・B）を選択必修科目としている。そのため、現在の大学生は、高校で地理を履修しているとは限らない。結果、中学校段階の地理的知識に留まっていることも考えられる。新教育課程における地理総合は、中学校社会科の既習知識の上に成り立つ。よって、高校・大学の違いはあるものの、前提となる既習知識（地理的知識）に類似性があるものと考えた。

## Ⅱ. 指導方法の方向性と枠組み

本章では、高校地理総合の単元構成を開発するにあたり、どのような指導方法の方向性、枠組みを重点化するか示す。その背景・根拠として、担当教員の配置・構造、分野・内容の関係強化、効果的な資料の活用といった地理歴史科全体の課題に着目した。その結果、以下の4つの内容に重点を置く。

第1に、地理総合の担当者の課題である。地理総合が、必修化となれば、一定数の歴史とりわけ世界史教員の担当が必要となる。地理授業に不慣れな教員が担当することで、地理の有する魅力が十分伝わらない可能性があ

る。その解決の一助として、歴史教員が重視する歴史的思考力を活かすことに注目した。現場の歴史教員に対するある調査<sup>1)</sup>によれば、歴史的思考力として「歴史的事象の因果関係の理解・考察」と「時代・社会全体構造の把握」の2点が挙げられた。今回は、前者の内容を関連させる。ある事象の分布は、どのような地理的要因・条件があるのか考察する。この過程を地理的事象の因果関係の考察と捉えれば、歴史的事象のそれを置換したに過ぎない。結果、歴史的思考力を転用することで、地理的思考力（地理的な見方・考え方）に結びつけることができよう。

第2に、地理総合の単元内容「生活文化の多様性」のうち、スポーツを文化の1つと考え、教材対象の幅を広げることである。解説によれば、「生活文化とは、地理的環境との関わりにおいて育まれる営みであり、広く人間の諸活動から生み出されるもののうち、衣食住を中心とする世界の人々の暮らしや、そこから生み出される慣習や規範、宗教などの主に生活様式に関わる事柄を意味している」と述べている。「スポーツ文化」の場合、各場面で用語の使用はあるものの、定義は曖昧である。ある研究所によれば、「スポーツ文化」とは、「スポーツをしたり、見たりすることによって快適で心地よい豊かな人生を送ること」<sup>2)</sup>と示している。スポーツ文化の対象者は、競技者や指導者に加え、観戦者も含まれる。また、観戦は、競技場・施設への直接の観戦に加え、画像を含めた間接的な観戦もある。スポーツ観戦の機会は、日常的と判断できる。ゆえに、生活文化の1つとして、スポーツを取り上げることには、妥当性があると考えられる。

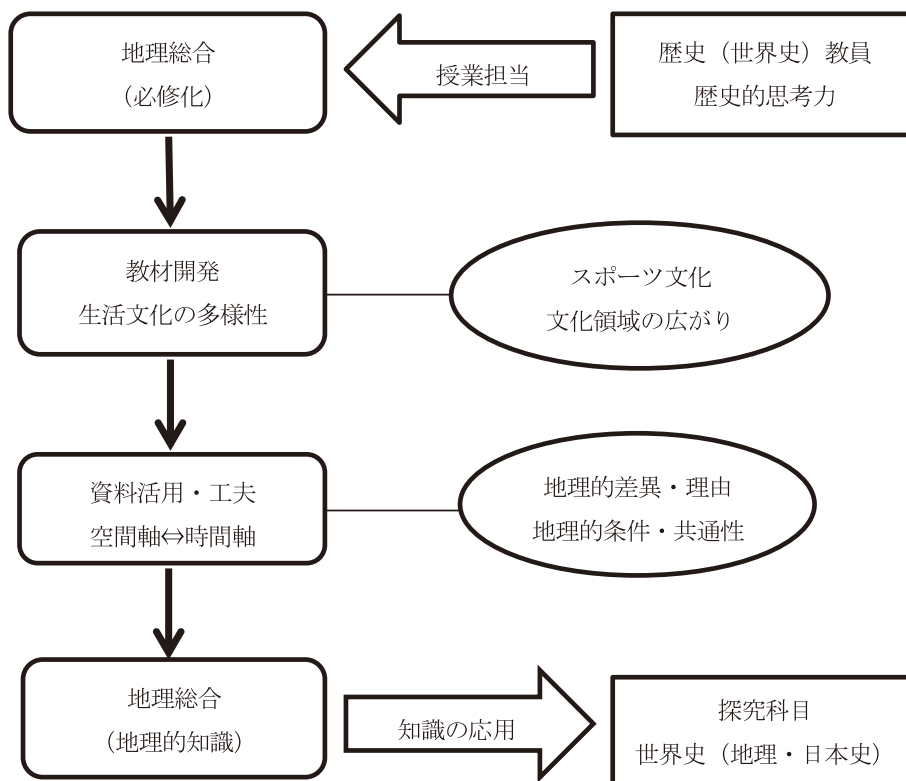


図1 指導方法の方向性・枠組み（構造図）

第3に、いくつかの資料（分布）を活用して、地理的差異及び理由に気付かせ、それをふまえ、全体として地理的条件の共通性を思考させる。空間軸から時間軸へ着目させることで、時間軸の重要性を再認識させることができる。

第4に、地理総合における授業実践を、探究科目へ活かす手立てを示すことである。今回は、歴史教員が地理授業を実践することをふまえているため、世界史探究への接続内容を示す。地理総合の学習内容が、世界史をはじめとする歴史授業に結び付きを示すことで、地歴融合の強化にも役立つ。

### Ⅲ. 大学教養科目「地理学」の授業実践

本章では、高校地理総合における単元構成の構想を、試験的に大学教養科目「地理学」（4年制大学1年～4年／70名）の授業実践として行い、授業の効果と課題を浮き彫りとする。

#### 1. 授業展開

##### 1) 授業の目的

授業実践は、「地理学」の1つ「スポーツ文化」をテーマとし、特別授業（90分）として実施したものである。授業の目的は、2019年ラグビーワールドカップ日本大会を題材として、出場国・地域（地理的環境）が、どのよ

うに影響・関連し合っているか、作業を交えて思考判断し、その認識を深めることである。

## 2) 導入部

導入は、2つの段階で構成している。第1に、本時の目的を示し、学習活動のイメージを与えた。第2に、ヨーロッパ（8チーム）、アフリカ（2チーム）、オセアニア（5チーム）、北米（2チーム）・南米（2チーム）の分布図を配付した。この分布図には、日本を除く19チームの出場国・地域の位置を記している。また、ヨーロッパとオセアニアには、国・地域名の選択肢を設けた。学生には、それぞれの位置に合う国・地域名を書くよう指示した（7分間）。その後、正答を示し、ヨーロッパとオセアニアに出場国・地域（13チーム）が多く、アジアのそれが少ないこと（1チーム＝日本のみ）を気付かせた。

## 3) 展開部

展開は、3つの段階で構成している。ここでは、出場国・地域のうち、特殊性があることを気付かせた。

第1に、イギリスからは、3チーム出場していることを確認し、その地域名を入れさせた。次に、アイルランドは、2か国合同チームであることを確認し、どの国と合同しているのか、国名を入れさせた（3分間）。その後、正答を示し、なぜ、イギリスのみ3チーム出場しているのか、なぜ、アイルランドのみ、2か国合同チームで出場しているのか、注目させた。

第2に、これまでの優勝国・地域（全9回）には、地理的分布の偏在があることと歴史的共通性があることを気付かせた。ラグビーワールドカップは、これまで9回開催し、優勝

国・地域は、ニュージーランド3回、南アフリカ共和国3回、オーストラリア2回、イングランド1回であることを確認し、これら4国・地域の地理的分布の傾向と、どのような歴史的共通性があるか、思考判断させた（5分間）。その後、正答を示し、南半球の国・地域に偏在していること（イングランドのみ北半球）、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ共和国はかつてイギリスの植民地であったことを気付かせた。

第3に、日本チームには、約半数の外国人（外国出身者を含む）が属することを確認し、どのような国・地域の出身者が多いか、予測させた（5分間）。その後、正答を示し、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ共和国といったラグビー強豪国からの出身者が多いことを気付かせた。

## 4) 終末部

終末は、2つの段階で構成している。第1に、上記の地理的分布の偏在や影響は、歴史的事実との関連性が深いことを説明した。具体的には、日本を除く、アフリカ、オセアニア、北米、南米の出場国は、いずれもヨーロッパ諸国・地域の進出（植民地化を含む）の影響を受けた共通性がある。とくに、イギリスからの影響が強く、旧植民地であった国・地域で構成するイギリス連邦に含まれているところが多い。よって、ラグビーの広がりには、イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国・地域の進出による文化の流入、定着、発展といった過程によって影響を受けた可能性が高いことに触れた。

第2に、今回のスポーツ文化（ラグビー）の題材とした授業を通じて、地理学的にどの

ようなことを学べたか、書くよう指示した。作業・説明をふまえ、「一見、全く関係がなさそう地理的分布に偏在・共通性があり、それを創り出した要因が歴史的事実にあったこと」を導き出せるか、確認した。

## 2. 授業効果

ここでは、終末で指示したワークシートの内容を手がかりに、どのような授業効果があったのか、明らかにする。

まず、学生Aは「その国・地域の歴史的事情が、現代の様々な事象に関係しているかもしれないというところ（時間軸の重要性）。」、学生Bは「植民地支配を受けている当時の人々の苦悩は図りしれないが、未来の現代にしっかりと繋がっているのだあとと思いまし

た。」、学生C「様々なデータをみるとき、地理的傾向を考えることで、歴史や情報がわかると分かった。」という記述を得た。これらは、空間軸と時間軸の関係性や重要性に気付いたものと考えられる。

その他も例示する。学生Dは「植民地化にあまり良い印象は持っていませんでした。しかし、この授業を聞いて、人の交流、文化の交流が早く行われると知りました。植民地化は悪いことだけではないと感じた。」、学生Eは「各国のスポーツは、人種による身体能力の優劣の差が主な原因と思っていたが、歴史的背景も関係してくると学んだ。」という記述を得た。これらは、既有知識や歴史的な見方・考え方を再構成したものと考えられる。

学生Fは「出場国の地理的偏在について学

表1 授業展開・構造（90分）

	主な学習活動	学生が獲得してほしい知識等
	前時の復習 10分間 ワークシート返却・講評確認	
導入部	【1段階】10分間 授業目的の提示	学習活動の全体像の把握
	【2段階】15分間 日本を除く出場国・地域の位置と地名の記入 (地図作業)	ヨーロッパ、アフリカ、オセアニア、北米、南米の出場国・地域の認識
展開部	【1段階】5分間 イギリスの3チームの地域名とアイルランドの2か国合同の相手国名の思考判断（ワークシート）	イングランド、スコットランド、ウェールズの地域名の認識と相手国イギリスの認識
	【2段階】10分間 優勝国・地域の地理的分布の傾向と歴史的事実の共通性の思考判断（ワークシート）	南半球に分布が多い理解 イギリスの旧植民地が多い認識
	【3段階】10分間 日本チームの外国人選手（外国出身者を含む）の出身地分布傾向の予測（ワークシート）	ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ共和国といったラグビー強豪国の出身者が多い認識
終末部	【1段階】15分間 地理的分布の偏在、影響の説明 (板書事項)	出場国・地域のうち、アフリカ、オセアニア、北米、南米は、ヨーロッパ諸国・地域の進出の影響（人的交流・文化の流入など）を受けた地域であるという認識 (空間軸と時間軸の関係性・重要性)
	【2段階】15分間 授業を通じての地理学的な学び (ワークシート)	

ぶことができた。], 学生Lは「日本チームにいる外国人選手から日本人選手が学ぶ技術や考え方があり, 互いにメリットがあると考える。」という記述を得た。これらは, 学習内容の理解やそれをふまえての自分の考えを表明したものと考えられる。

学生Gは「スポーツという題材から地理的傾向や歴史まで掘り下げるのは, とても面白いと感じた。], 学生Hは「ラグビー以外にも野球などは白人のスポーツだと言われていた背景があるので, これを機会に調べてみたいと思った。], 学生Jは「他のスポーツでも国との関係や強いチームの共通点などに着目して考えてみたいと思った。」という記述を得た。

これらは, 地歴融合した学習の醍醐味, 学習内容の発展・追究を示したものと考えられる。

学生Kは「身近な最近話題になったラグビーを絡めた授業をすることで, いつもより積極的に参加できたと感じる。」という記述を得た。これは, 教材選択・開発において, 身近な内容やトピックス的内容を用いる有用性を示したものと考えられる。

以上から, 学生A~Cの記述に代表されるように, 授業の目的は, 概ね達成できたものと解釈できる。加え, 多岐にわたる記述から, スポーツを教材化する有用性も示されたものと判断できる。

表2 授業ワークシートの内容にみる授業効果の例

【 空間軸⇔時間軸の関係性 】

- A その国・地域の歴史的事実が, 現代の様々な事象に関係しているかもしれないというところ (時間軸の重要性)。
- B 植民地支配を受けている当時の人々の苦悩は図りしれないが, 未来の現代にしっかりと繋がっているのだと思いました。
- C 様々なデータをみると, 地理的傾向を考えることで, 歴史や情報がわかると分かった。

【 歴史的な見方・考え方の広がり 】

- D 植民地化にあまり良い印象は持っていませんでした。しかし, この授業を聞いて, 人の交流, 文化の交流が早く行われると知りました。植民地化は悪いことだけではないと感じた。
- E 各国のスポーツは, 人種による身体能力の優劣の差が主な原因と思っていたが, 歴史的背景も関係してくると学んだ。

【 地理的分布の理解 】

- F 出場国の地理的偏在について学ぶことができた。

【 地歴融合の学習の魅力 】

- G スポーツという題材から地理的傾向や歴史まで掘り下げるのは, とても面白いと感じた。

【 学習内容の発展・追究 】

- H ラグビー以外にも野球などは白人のスポーツだと言われていた背景があるので, これを機会に調べてみたいと思った。
- J 他のスポーツでも国との関係や強いチームの共通点などに着目して考えてみたいと思った。

【 学習活動の意欲 】

- K 身近な最近話題になったラグビーを絡めた授業をすることで, いつもより積極的に参加できたと感じる。

【 学習内容に関する自分の考え 】

- L 日本チームにいる外国人選手から日本人選手が学ぶ技術や考え方があり, 互いにメリットがあると考える。

資料) 授業ワークシートの内容。

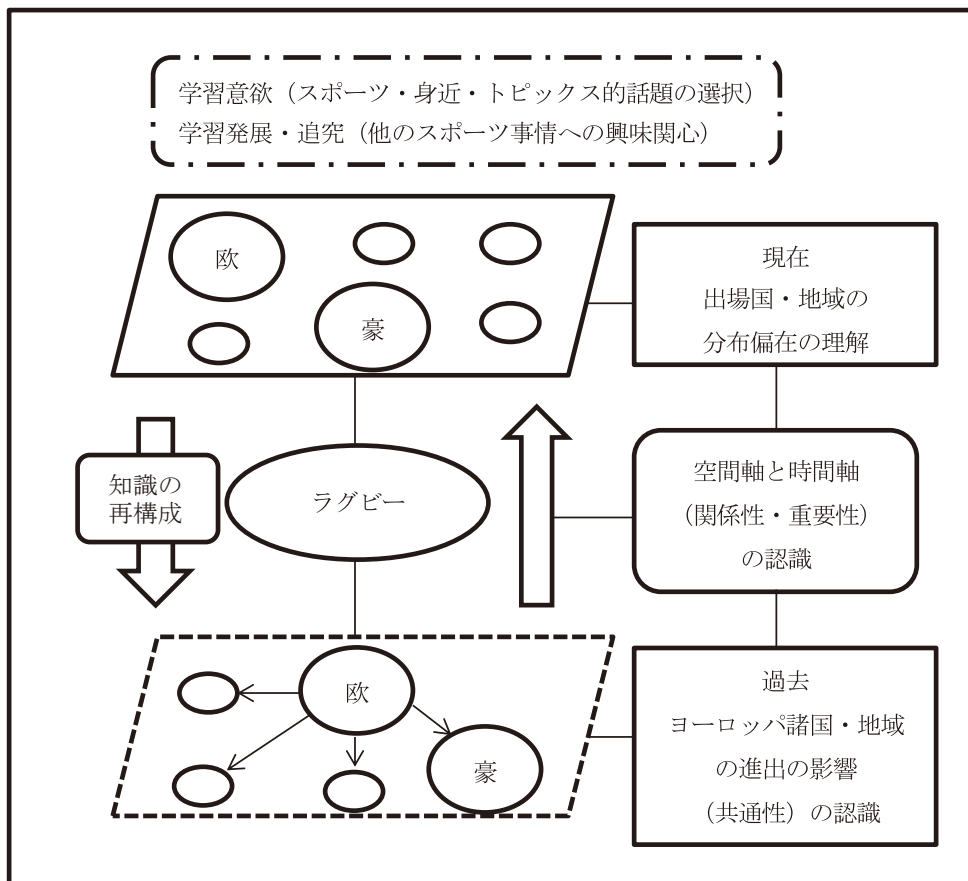


図2 授業効果 (例) の構造図

#### IV. 単元構成の詳細

##### 1) 関連する学習指導要領の内容

スポーツを教材化する場合、地理総合のどの単元内容に可能性があるか述べる。地理総合は、大きく3つの「地図・地理情報システム」、「国際理解・国際協力」、「持続可能な地域」の単元内容から成る。そのうち「地図・地理情報システム」は、地理総合の授業の始めに行い、後の単元内容の学習基盤となる。

さて、スポーツを文化の1つの構成内容と考えた場合、「国際理解・国際協力」の(1)生活文化の多様性と国際理解に関する。学

習内容をみれば、知識では、「世界の人々の特色ある生活文化を基に、人々の生活文化が地理的環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性をもつことや、地理的環境の変化によって変容することなどについて理解すること」、思考力・判断力、表現力等では、「世界の人々の生活文化について、その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、主題を設定し、多様性や変容の要因などを多面的・多角的に考察し、表現すること」とある。

例えば、日本人選手が、欧米諸国のチームへ移籍、外国人選手が、日本チームへ移籍す

表3 関連する学習指導要領の内容・内容の取扱い（国際理解・国際協力）

## (1) 生活文化の多様性と国際理解

場所や人間と自然環境との相互依存関係などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

- (ア) 世界の人々の特色ある生活文化を基に、人々の生活文化が地理的環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性をもつことや、地理的環境の変化によって変容することなどについて理解すること。  
 (イ) 世界の人々の特色ある生活文化を基に、自他の文化を尊重し国際理解を図ることの重要性などについて理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

- (ア) 世界の人々の生活文化について、その生活文化が見られる場所の特徴や自然及び社会的条件との関わりなどに着目して、主題を設定し、多様性や変容の要因などを多面的・多角的に考察し、表現すること。

## 内容の取扱い

(ア) (1) については、次のとおり取り扱うこと。

「世界の人々の特色ある生活文化」については、「地理的環境から影響を受けたり、影響を与えたりして多様性をもつこと」や「地理的環境の変化によって変容すること」などを理解するために、世界の人々の多様な生活文化の中から地理的環境との関わりが深い、ふさわしい特色ある事例を選んで設定すること。その際、地理的環境には自然環境だけでなく、歴史的背景や人々の産業の営みなどの社会環境も含まれることに留意すること。また、ここでは、生活と宗教の関わりなどについて取り上げるとともに、日本との共通点や相違点に着目し、多様な習慣や価値観などをもっている人々と共存していくことの意義に気付くよう工夫すること。

資料) 平成30年告示高等学校学習指導要領解説地理歴史編。

るといった場合がある。移籍の主な理由として、より高いレベルでのプレーを求める、活躍できる場を求めるといったことが考えられる。すなわち、外国であれば、どこでも良いわけではない。こうした実態は、地理的環境から影響を受けたり（例：日本→外国）、影響を与えたり（例：外国→日本）することから多様性をもつといった内容に当てはまるであろう。

## 2) 単元構成の内容

前章の大学授業の成果をふまえ、単元構成を3時間とした。また、各学習場面では、地図帳の活用を徹底した。発問や指示の手がかりとなる資料（地図帳）があることで、学習意欲を引き出したいと考えた。そのような工夫・改善を行い、以下のような単元構成（目標、展開、評価）を構想した。

## 単元目標

- 1 出場国・地域の地理的分布の傾向について説明できる
- 2 出場国・地域のうち、イギリスとアイルランドの特殊性について説明できる
- 3 出場国・地域における歴史的なつながり（関係性・共通性）が、ラグビーの広がり（関係性・共通性）に影響を与えたことを説明できる

## 3) 歴史学習とのつながり

地理総合の授業では、ラグビー出場国・地域の地理的分布の偏在に着目させ、その影響にヨーロッパ諸国・地域の進出が関係していることを導き出した。他方、ヨーロッパ諸国・地域の進出の背景、影響、変容といった詳細な内容は、地理総合の学習内容を超える。それを補完・つなぐ役割として歴史学習との関



## 単元構成（授業展開／3時間構成）

	主な学習活動	留意点など
1時間目 (50分)	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習課題：ラグビー出場国・地域（優勝国・地域）には、どのような地理的分布の傾向があるだろうか？</p> <p>○2019年ラグビーワールドカップ日本大会の出場国・地域（20チーム）名を分布図に入れよう【技能】</p> <p>●地域構成をヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、北米、南米に分けた場合、どのような地理的分布の傾向があるだろうか 【思考力等】</p> <p>□ラグビーワールドカップは、9回開催されています。今回は、南アフリカ共和国が優勝しました。これまでの9回のうち、優勝国・地域は、ニュージーランド3回、南アフリカ共和国3回、オーストラリア2回、イングランド1回です。</p> <p>●これまでの優勝国・地域には、どのような地理的分布の傾向があるだろうか【思考力等】</p> <p>□本時の学習内容について確認</p>	<p>・地図（位置・選択肢入り）</p> <p>・地図帳を参照</p> <p>・作業後、確認</p> <p>・分布（地域構成）をみての多少を判断</p> <p>・作業後、発表共有・確認（ヨーロッパ・オセアニアに多く、アジアが少ない）</p> <p>・対象国・地域の位置をみての判断</p> <p>・作業後、確認（南半球に概ね分布）</p>
2時間目 (50分)	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習課題：出場国・地域の不思議（異質性）について考えてみよう</p> <p>○グレートブリテン島の位置、国名を確認しましょう【技能】</p> <p>●3つの地域（イングランド、スコットランド、ウェールズ）は、いずれもある国に属します。さてどこの国でしょうか【技能・思考力等】</p> <p>●イギリスは、4つの地域で構成されています。もう一つの地名を挙げてみましょう【技能・思考力等】</p> <p>●イギリスは、出場国・地域名にはありませんでした。しかしながら、出場しています。さて、イギリスからは、何チーム出場していると考えられますか【思考力等】</p> <p>●アイルランドは、2か国の合同チームとして出場しています。さて、どこの国でしょうか【思考力等】</p> <p>□本時の学習内容について確認</p>	<p>・地図帳を参照（イギリス）</p> <p>・地図帳を参照</p> <p>・作業後、確認（イギリス）</p> <p>・地図帳を参照（北アイルランド）</p> <p>・作業後に確認（4チーム）</p> <p>・作業後に確認（イギリス）</p>
3時間目 (50分)	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">学習課題：日本チームの外国人選手（外国出身者を含む）は、どのような出身地が多いだろうか？また、出場国・地域には、どのような歴史的なつながり（関係性・共通性）があるだろうか</p> <p>○日本チームに属する外国人（外国出身者を含む）の分布図を作成してみよう【技能】</p> <p>●日本チームに属する外国人（外国出身者を含む）には、どのような地理的分布の傾向があるだろうか【思考力等】</p> <p>□ヨーロッパ諸国の他地域の進出（とくにイギリス）今回の出場国・地域をみると、ヨーロッパ・日本以外は、ヨーロッパからの進出（植民地化を含む）の影響を受けた地域がほとんど。ヨーロッパ人の進出が、言語、スポーツ等の文化の流入・定着・発展にも深く影響</p> <p>○本時の学習でわかったことを書いてみよう【知識】</p>	<p>・資料参照→地図記入</p> <p>・地図をみての多少の判断（強豪国出身者が多い）</p> <p>・空間軸と時間軸の関係性・重要性の理解</p> <p>・ワークシートへ記入</p>

○=指示 ●=発問 □=説明・確認

【評価内容】知識=知識 技能=知識・技能

思考力等=思考力・判断力・表現力等

## 評価基準例（知識の場合、記述内容例）

評価A (高度・詳細な知識)	評価Bの内容に加え、以下のような説明がある。 ヨーロッパ人の進出が、言語、スポーツ等の文化の流入・定着・発展にも深く影響している。
評価B (授業で最低限獲得してほしい知識)	今回の出場国・地域のうち、ヨーロッパ・日本以外は、ヨーロッパからの進出（植民地化を含む）の影響を受けた地域がほとんどである。
評価C (内容の理解不足)	今回の出場国・地域は、歴史的事実に関係している。

連が重要となってくる。

今回の学習内容は、中学校社会科歴史的分野の場合、「ヨーロッパ人来航の背景と影響」、高校世界史探究の場合、「結び付くユーラシアと諸地域」に関連する。世界史探究では、ヨーロッパの進出に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目して、構造的に理解するようになっている。

結果、中学校と高校の接続強化、地歴融合

の連携強化の具体として位置付けことができるであろう。

## V. おわりに

本稿の成果は、大きく3点挙げられる。

第1に、生活文化の単元において、スポーツを題材とした地理総合の単元構成を開発し、空間軸から時間軸へつなげる学習活動を示すことができた。また、歴史的思考力を活

表4 地理総合「単元構成の内容」に関連する歴史学習（中高）の内容

中学校社会科歴史的分野

(3) 近世の日本

(ア) 世界の動きと統一事業

ヨーロッパ人来航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを基に、近世社会の基礎がつけられたことを理解すること。

内容の取扱い

ウ 「ヨーロッパ人来航の背景」については、新航路の開拓を中心に取扱い、その背景となるアジアの交易の状況やムスリム商人などの役割と世界の結びつきに気付かせること。

高等学校地理歴史科世界史探究

(2) 結び付くユーラシアと諸地域

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 略

(イ) アジア海域での交易の興隆、明と日本・朝鮮の動向、スペインとポルトガルの活動などを基に、諸地域の交易の進展とヨーロッパの進出を構造的に理解すること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 略

(イ) 諸地域の交易とヨーロッパの進出に関わる諸事象の背景や原因、結果や影響、事象相互の関連、諸地域相互のつながりなどに着目し、主題を設定し、諸資料を比較したり関連付けたりして読み解き、アジア海域での交易の特徴、ユーラシアとアメリカ大陸間の交易の特徴とアメリカ大陸の変容などを多面的・多角的に考察し、表現する。

資料) 平成29年告示中学校学習指導要領解説社会編及び平成30告示年高等学校学習指導要領解説地理歴史編。

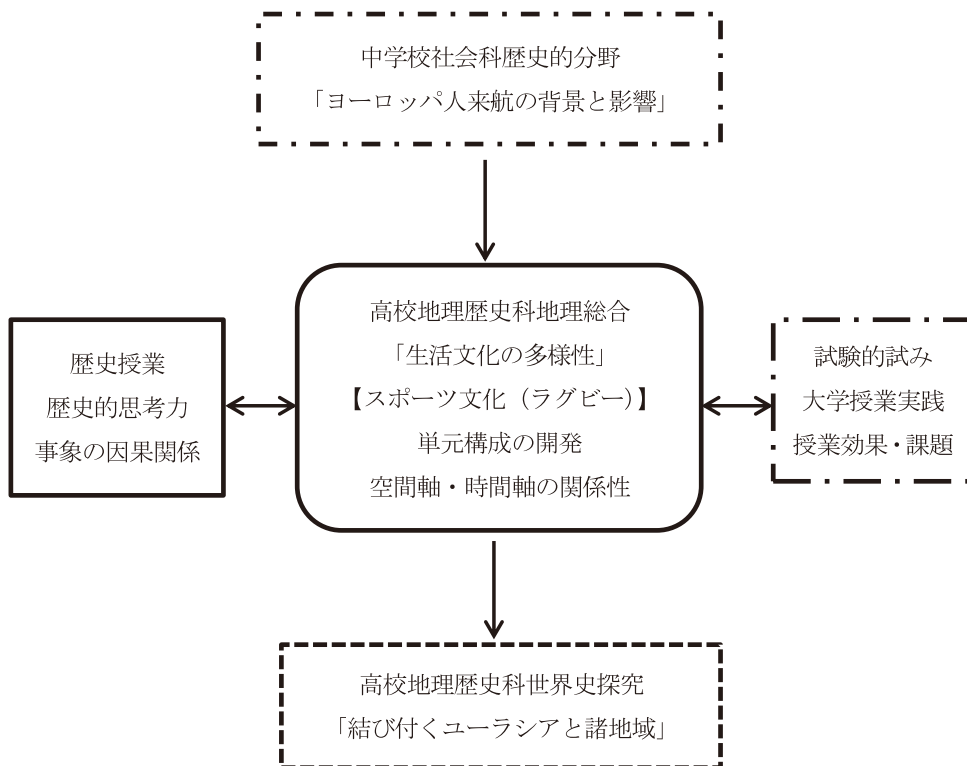


図3 本稿の成果の関係性

注) 一点鎖点は、高校以外の教育機関を意味する。点線は、選択科目であることを意味する。

かすため、事象の因果関係を考察できるような学習活動を取り入れ、歴史授業の実践を地理授業で転用できるように試みた。

第2に、単元構成の構想は、試験的に大学授業として行い、その成果をふまえ、授業の効果や課題を確認し、高校授業の工夫・改善に活かすことができた。

第3に、関連する学習内容は、中学校社会科歴史的分野や世界史探究の学習内容として接続・連携できることを示唆した。

今後は、中学校社会科歴史的分野の学習内容を、どのような場面で地理総合の授業に活かすか、地理総合の学習内容を、どのような場面で世界史探究の授業に活かすか、具体化する必要があるだろう。同時に、中学校社会科

地理的分野や地理探究への接続・連携についても、どのような学習内容で実現できそうか考えていく必要があるだろう。

## 注

- 1) 『社会科教育』2019年7月号, pp.112-113「歴史的思考力を伸ばす授業デザイン」参照。
- 2) <https://www.yafo.or.jp/2002/06/25/4196/> (スポーツ文化の醸成とは／山梨総合研究所) 参照。

## 文 献

- 1) 菊地達夫：「スポーツ・ツーリズムを題材とした高等学校「地理探究」における単元構想の開発—冬季五輪・アジア開催地を事例として—」, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要第10号, 153-160, 2019.
- 2) 草原和博他：歴史的な見方・考え方の働きはいかに可視化できるのか—思考ツールを用いた歴史導入単元「江戸時代の朝顔ブーム」を手がかりに—, 広島大学大学院教育学研究科紀要第二部第66号, 41-50, 2017.
- 3) 三堀潔貴：「文化としてのスポーツ—サッカーの世界地理—」『現代世界をどう教えるか』地理11月増刊, 古今書院, 84-87, 1996.
- 4) 地理教育研究会編：『授業のための日本地理』第5版, 古今書院, 93-97, 2010.